



Title	伏見の桃花を詠む：『草蘆集』を中心に
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 119-130
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78096
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伏見の桃花を詠む

—『草廬集』を中心に—*

福井 智子 **

Ryū Sōro (1714-1792) was one of the most popular Japanese poets of *kanshi* (Chinese poetry) in Kyoto in the Edo era. He was one of this era's most proficient poets and his favorite theme was his hometown, Fushimi in Kyoto. In those days, Fushimi was very famous for its beautiful peach blossoms, which were planted on the site of Fushimi Castle. Fushimi Castle, built by Toyotomi Hideyoshi, was magnificent. But after the fall of the Toyotomi family, it was completely demolished. As people began to plant blossoming peach, Fushimi became famous for the peach blossoms. The sudden change of Fushimi moved many people deeply and many poems about Fushimi Castle and the peach blossoms were composed. But no one wrote more poems about Fushimi compared to *Tao Hua Yuan*, the Peach Blossom Spring, than Ryū Sōro. *Tao Hua Yuan*, the Peach Blossom Spring, created by the Chinese poet Tao Yuanming (365-427), is a kind of *locus amoenus*. Because Ryū Sōro admired Tao Yuanming, it is obvious that he was affected by Tao Yuanming and his works. But the most important factor to make him compose poems about *Tao Hua Yuan*, was that Fushimi was the dear hometown for Ryū Sōro. Since he had left Fushimi in early childhood because of his father's death and poverty, he lived away from Fushimi almost all of his life for some reason or other. But he always wished to go back to

*Poetry about the peach blossoms in Fushimi : Focusing on Sōro shu (Tomoko FUKUI)

**言語文化研究科博士後期課程

Fushimi, and the love of his hometown grew to the admiration for the ideal place. So this thought made him imagine Fushimi as *Tao Hua Yuan*. Ryū Sōro's works give us an example of how people describe *Tao Hua Yuan* in Edo era *kanshi*. And it tells us the way that people try to bring the ideal place closer to home by way of poetry.

1 はじめに

江戸時代中頃、京で最も活躍した詩人に龍草廬（1714-1792）がいた¹⁾。本名は武田公美といい、京・伏見に生まれた。先祖に伏見の御香宮社の宮司がいたと、地方誌『伏見鑑』に見られることから、この地に馴染みの深い家の出身であることがわかる。しかし龍草廬は幼い頃、父親の死と家計の貧窮の為に母を残して伏見を離れ、京都の商家で養育された。後に詩人は、この故郷との別離が大変苦い経験であったと、作品の中で繰り返し述べている。商家で育ったものの、草廬の関心は専ら学問にあった。当時、漢学界を風靡していたのは、荻生徂徠一門による古文辞の学であり、草廬もこれを好んで学んだ。そこには将来学問で身を立て、家を起こそうという強い意志があった。そこでまず草廬は24歳の時、四条で私塾を開き、漢詩を専門に教授した。そのなかで草廬は芥川丹邱、清田儋叟、木村蓬萊と「幽蘭社」という詩社を結んだ。これは、すでに江戸で起こっていた詩文全盛の気風を京にもたらす引き金となり、その後多くの詩社が次々と生まれ出た。それから43歳の時に、草廬は彦根藩の文学（諸藩の儒員の称）に就任する。以後藩勤めをやめて京に戻るまでの18年間、彦根に居住して、この地の学問振興に力を尽くした。こうして草廬は、学門で身を立てるという初心を成就させたのであった。また龍草廬は、儒者としての経学、詩作に止まらず、国学、和歌そして書道にも取り組み、それぞれに優れた作品を残した。これらは皆、龍草廬が文芸に対して、きらびやかな才能の持ち主であったことを示すものと言える。

さて、龍草廬の詩集である『草廬集』（総計七篇三十六卷二十一冊）を見ると、京都の伏見を詠む作品が多いことに気づく。そしてその中に、伏見の町を彩った桃花と、桃源郷に見立てられた伏見の風景を描く一連の詩があることに注目させ

¹⁾ 龍草廬の生存年間は、中野三敏氏の説（『龍草廬と幽蘭社』『中国叢書9 日本漢学』）をとる。

られる。当時、桃の名所であったことから、伏見は多くの人々の俳句、漢詩に詠まれていた。しかし、龍草廬ほど数多く伏見の桃花を詩に詠み、そこに桃源郷まで描き出した人を他に見ることはできない。つまりこれらの龍草廬の作品は、この詩人独自の伏見に対する思い、また桃源郷という詩語のとらえ方を、端的に示すと考えられるのである。そこで以下、『草廬集』に収められた作品を中心に、漢詩人龍草廬の詩作における京・伏見と、桃源郷モチーフに対する扱いについて、考察していこうと思う。

2 『草廬集』に見られる伏見の桃花―桃源郷への連想

龍草廬は、桃花が美しく咲く伏見の春景色を好んだ。それは、伏見の美しさを称える為に、中国東晉の詩人である陶淵明(365-427)が描き出した理想郷・桃源郷を、そこに見立てていることからわかる。いくつか作品を取り挙げてみよう。

泛舟到伏水桃源 舟を泛かべて伏水の桃源に到る

春風倚棹武陵溪	春風棹に倚る 武陵溪
十里仙源望欲迷	十里の仙源 望み迷わんと欲す
緑水青山晉時色	緑水青山 晉時の色
桃華繚乱古城西	桃華繚乱たり 古城の西

(『草廬集』二篇卷之五)

春風が心地よく吹く中、草廬を乗せた舟は桃の名所である「伏水」伏見へ向かう。その様子に詩人は、陶淵明の作品『桃花源記』に描かれた、仙源に迷い込む武陵の漁師を重ねるのである。なぜなら伏見へと続く緑色の川と新緑の山は、その漁師が見た景色と同じぐらいすばらしい眺めであり、また伏見城の西側には、一面に広がる桃花があるからである。「武陵溪」「仙源」「晉時色」といった詩句をちりばめ、草廬は伏見を桃源郷の世界へと仕立てあげている。

賦桃源春色 桃源春色を賦す (伏水の詩六首並びに引其の二)

伏城元似武陵源 伏城 元より武陵源に似たり

緑水青山春可憐	緑水青山 春 ^{あわ} 憐れむべし
嶺上遥通黄檗山	嶺上 遥かに通ず 黄檗山
津頭來泊浪華船	津頭 来たりて泊す 浪華の船
千家鶏犬聲方近	千家の鶏犬 声 ^{こゑ} 方に近く
萬樹桃花影自連	萬樹の桃花 影 ^{おのづか} 自ら連なる
相値邨翁髮如鶴	相値ふ 邨翁 ^{そんおう} 髮鶴 ^{かみつる} の如きに
問君不是避秦仙	問ふ 君は是れ ^{ひしん} 避秦の仙にあらずやと

(『草廬集』三篇卷之四)

「伏城」伏見は、元々桃源郷の舞台である「武陵源」に似ていて、緑の水と新緑の山の春の景色がすばらしい。この地の山並みは黄檗山に連なり、「浪華」浪花から来る船はここ「津頭」舟付き場に停泊する。多くの家から犬や鶏の声が響きわたり、そして一面に広がる桃花はそのあまりの数の多さから、各々重なり合って咲いている。この光景に、山奥深い理想郷である桃源郷を思わずにおれない。だから「鶴」のように白い髪の人に出会くと、「あなたは遠い昔、秦の始皇帝時代に桃源郷へ逃れて、仙人になった人ではありませんか」、とたわむれにたずねてしまうのであった。この詩にも「武陵源」「鶏犬聲」「萬樹桃花」「避秦仙」など、伏見の景色に桃源郷を連想させる表現があり、前掲の詩と同様のイメージで貫かれている。

このような桃花咲く伏見を桃源郷に見立てる趣向は、龍草廬に好んで用いられた。なぜなら草廬の伏見を詠む他の詩にも、同じ趣向を用いた例が多く見られるからである。それに直接関係する詩句、詩題を書き下して挙げると、「更に漁客に逢ひて問ふことを用いず、此の中に秦を避くるの家の有ることを知る」(「伏水の即氏宅に集まりて、江上の春望を賦す、家の字を得たり」『草廬集』二篇卷之五)、「同人手を携えて仙源を問ふ」(「春日、予伏水に帰りて宮子曜を訪れる。而して相携えて往きて、古壘の桃花を鑑る。…子曜、之に継ぐに源尊の二字を以てし、遂に一小律を成す。予も亦、其の韻に同ず」『草廬集』五篇卷之八)、「緑水青山春^{あわ}憐れむべし、桃花源上秦仙を憶ふ」(「伏水の桃源」『草廬集』七篇卷之三)、「桃李^{かすみ} 霞を帯び一村^{いつ}を襲む、一村全く似る武陵源」(「伏水の古城」『草廬集』七篇卷之三)などである。

ところで、龍草廬に伏見を桃源郷と言わしめた桃花は、実はこの地に元来存在したものでなかった。それは伏見をめぐるある歴史的事件をきっかけに、にわ

かにこの地に出現したものであった。

3 伏見と桃花

伏見は「山城」という国名を持つことからわかるように、山々を自然の要塞とする地形にある。そして大堰川、宇治川、木津川の三川が合流する淀川が山城平野から大坂に向けて流れ出る、その入口に位置している為、伏見は古くから交通の要衝として栄えた。それが江戸時代、その歴史の中に桃の名所として栄えた時期を持った。まず伏見に多くの桃が存在したことを記す最も古い記録として、妙法院宮堯怒法親王の日記に見られる延宝二年(1674)三月十三日の条「伏見の里桃花盛りの由伝え聞くの間、今日一兩輩を率いて伏見に行き桃花を見る」があるという²⁾。「桃山」の名が伏見についたのもこの頃であり、この地の桃花は次第に各地に知られるようになった。そして宝永八年(1711)に刊行された、貝原益軒の京都案内記『京城勝覧』に、「伏見京橋より河舟にのりて大坂に下る。御香の宮有。神功皇后なり。山に秀吉公の城跡あり。伏見に春は桃花多くして、吉野の櫻に對すべし。盛の時見るべし。竹田の辺、遠方より見たるがもつともよし。」や「伏見藤森伏見の城跡、山上に天守の址有。山上山下甚廣し。山下桃の木多し、春は美観をきわむ。」と記述されて以来、伏見の桃花の名所としての地位は完全に定着したのだった³⁾。またこの記述から、桃花が城跡、つまり伏見城跡に多く植えられていたことがわかる。

伏見城はそもそも、豊臣秀吉が築いた豪華絢爛な城郭であった。全国統一を成し遂げた秀吉は、その勢いに乗って大陸進出をもくろみ、朝鮮半島に大軍隊を送り込んでいた。当初その戦闘が秀吉に有利に進んだ為、中国側から講和の使節を迎えることになる。その使節を迎えたのがこの伏見城であった。これは当時の建築、芸術における最高水準をつぎ込んで築いた城で、まさに豊臣秀吉の絶大な権力を象徴するものであった。けれども秀吉の大陸進出は結局失敗に終わった。そして秀吉の死後、豊臣氏は滅び、政権は徳川氏へと移った。この歴史の流れのな

²⁾ 林屋辰三郎『京都文化の座標』pp.207-214

³⁾ 大日本史蹟研究会『伏見桃山』pp.34-35

か、伏見城は戦火に焼かれはしたものの修復されて、江戸時代初期まで京阪地域の軍事要塞として存続した。しかし元和六年の幕府命により、最終的には取り壊しとなった。そしてその時出た遺材は、京都の諸寺院に供給されたり、淀城の増修材料として用いられていった。こうして伏見城は一時期、完全に廃墟と化したのである。ところがそこに、誰の手によったか、桃の植樹が始まった。それをきっかけに伏見では桃の数が増え、ついには桃林とまでなったのである。まさに伏見の桃花は、伏見城の消滅から生まれたと言えよう。しかしそれがあまりにも見事な桃林であった為、人々の心に豊臣氏の滅亡と伏見城の取り壊しは、より一層悲しく響いた。そこで人々は、その思いを詩に詠んだのである。そのなかで、とりわけ有名な漢詩として、次の二首がある。

豊公故壘桃花

豊公故壘の桃花

伊藤東涯(1670-1736)

叱咤時移霸業空

叱咤の時移り 霸業空し

百年葵麥動春風

百年葵麥 春風に動く

金湯變作桃花塢

金湯変じて 桃花塢と作り

遠近霞蒸千里紅

遠近霞蒸す 千里の紅

(『紹述先生集』巻二十九)

豊臣秀吉による大陸進出で、中国側から和議の使節がここ伏見城にやって来た。その使節が携えてきた爾書のなかに、秀吉を「日本国王に封ずる」の記述があった為、使節は秀吉の怒りを買い、追い返された。この秀吉が中国側の使節を「叱咤」したという事件は、当時とても有名な出来事であったという⁴⁾。しかし時代が豊臣氏から徳川氏の世へと移ると、かつて秀吉が中国の使節を前に「叱咤」した伏見の城は取り壊され、雑草生い茂る廃墟と化してしまった。「金湯」というのは、『漢書』蒯通伝の故事にある「金城湯池」のことで、守りの固い城の意味である⁵⁾。この詩では伏見城を「金湯」といい、それが壊された後、桃の名所「桃花塢」となったと表現する。そしてこの城跡にできた「桃花塢」桃林は一面に広がり、周囲を紅色に蒸している、と結ぶ。豊臣氏の滅亡を、伏見城の消滅と

⁴⁾ 加藤二郎『伏見桃山の文化史』pp.217-218

⁵⁾ 『漢書』蒯通伝：皆爲金城湯池、不可攻也、顔師古曰：金以喻沸熱不可近

満開の桃花の対比で語るこの詩には、栄枯盛衰の気分が漂う。伊藤東涯にはまた、「伏見故城の桃花」と題する漢詩もある。

伏水桃山

伏水桃山

頼山陽(1780-1832)

萬樹桃花映碧流

万樹の桃花 碧流に映ず

豊家誰認舊金

豊家誰か認む 旧金甌^{きんおう}

春風曾返東征旆

春風曾つて返す 東征の旆^{はい}

遺恨無人教放牛

遺恨す 人の牛^{はな}を放たしむる無きを

(『山陽詩鈔』)

前詩と同様、はかなく滅んだ豊臣氏を憐れむ作品である。「金甌」とは『南史』朱异^{しゅい}伝に見られる語句で、外国から侵略を受けたことのない独立国家を意味し⁶⁾、ここでは豊臣氏の伏見の城を指す。かつて秀吉は、全国統一に向けて東国へ遠征軍を派遣し、その軍隊が春風に旗をなびかせて戻るのが、ここに出迎えたのであった。これは豊臣氏の絶頂期を表している。しかしその後、大陸進出での失敗、秀吉の死により、あっけなく政権を徳川氏に奪われ、豊臣の家は滅亡してしまった。それを嘆いて頼山陽は言った。昔、周の武王は全国を治めた後、これ以上戦争を行わないことを民衆に公言し、戦争に用いた牛を桃林に放ったという⁷⁾。秀吉もこれに倣い、更なる勢力拡大を望まなければ良かったのだ、と。龍草廬もまた、伏見の桃花を豊臣氏の悲劇と共に詠んだ詩を作っていた。例えば「傷豊公城墟」(『草廬集』三篇卷之四)の序では「豊臣秀吉、城を此に築く。次に我が神君に属す、廃した後、邨民多く桃花を種ふ」と伏見の桃花の由来を述べて、「兵馬三軍^{がいくさ}骸骨と化し、金湯^{きんとう}百雉^{ひやくち}灰塵と作る、祇今唯だ桃花の色のみ有りて、満野霞籠む十里の春」と歌う。その他にも「試しに問ふ豊王の全盛の事を、桃花語る無くして春風に笑ふ」(「伏水古壘桃花」『草廬集』七篇卷之三)、「祇今唯だ桃花の色有りて、空しく照らす古城荒廢の春」(「古城桃花」『草廬集』七篇卷之三)などの詩句が見られ、これらは先に挙げた二首の漢詩同様、今まさに盛りである伏見の桃花を、豊臣氏の滅亡と対比することで、栄華のはかなさを強調している。

⁶⁾『南史』朱异伝：我國家猶若金、無一傷

⁷⁾『尚書』武成篇：梃馬于華山之陽、放牛于桃林之野

このように伏見の桃花は、豊臣氏の滅亡に思いを馳せる時に語られることが多く、とりわけ漢詩において、その傾向は顕著であったと思われる。江戸時代の地方史『伏見鑑』には、伊藤東涯の「豊公故壘の桃花」が伏見の桃花を詠む代表的な漢詩として挙げられていた。またこの書を参照して編纂されたと思われる近代の地域史関係の書は、この東涯の詩、あるいは頼山陽の「伏水桃山」や荻生徂徠の「豊公の旧宅に寄題す」といった詩を引用する。つまり当時の漢詩人の関心は、伏見の桃花の美しさよりも、それを生み出すことになった歴史的事実にあり、またそれを詠む詩にこそ高い評価が与えらたと見ることができる。それは漢詩が江戸時代の初期に、思想的理論的内容を持った、儒学に直接つながった文芸と考えられていたことに起因する。このような漢詩に、後の詩人たちは人間の細やかな感情や日常の生活を表現する、今日的な意味での文学観を与えていくが、従来の漢詩観はその根底に常に存在し続けた。その中で見ると、龍草廬の伏見を桃花の美しさから桃源郷に見立てた作品は、かなり趣を異にしていることがわかる。またその為か、伏見を詠んだ作品はかなり多いものの、草廬の詩は、あまり伏見を紹介する書物に引かれることはなかった。つまり、ひたすら美しい伏見の桃花を愛で、その景色を桃源郷に見立てる詩風というものは、龍草廬の極めて個人的な趣向であったと言える。またそれは、草廬の一個人かつ詩人としての、伏見に対する特別な思いを反映しているのである。

4 龍草廬の学問姿勢と故郷・伏見への思い

江戸時代の儒者の経歴を記した資料『先哲叢談』後編に、龍草廬の項目がある。それには、「草廬、諸葛武侯と陶靖節が人と為りを慕ふ。言ひて曰く、吾は出でては即ち武侯と為らん、處しては靖節と為らん。而して武侯の如くせんか、即ち時その時に非ず。甘んじて靖節と為らんか、而して口を餬べき田二頃無く、身を置くべき一區無し。故に草廬を以て號と為し、松菊を以て居に名づく。」(原文は漢文)と記されている。つまり龍草廬は、「諸葛武侯」諸葛孔明と「陶靖節」陶淵明の人柄を尊敬していた。だから武力と知力で世に出ることが求められるような時代ならば、諸葛孔明の様になろう、と思った。しかし龍草廬の生きた世はもはや、そのような時代ではなかった。むしろ陶淵明の様に粗末な家で暮らし、詩文を作って満足する生活の方が、草廬の実状によりふさわしかった。また陶淵明の隠逸の精神は、学問で身を立てようと志す草廬にとって、学ぶべき理想の境地

であったと言える。この陶淵明への親近感及び敬愛の姿勢は、草廬の作品では例えば「淵明、琴を抱くの図に題す」(『草廬集』二編卷之五)や「陶淵明図に題す」(『草廬集』三編卷之六)などに直接見ることができる。またそれは、陶淵明作品から引いた語句を積極的に自らの詩作に取り入れていく態度に反映されていて、その最たるものが「桃源郷」に関連した詩語の使用であった。そこで当時桃の名所であった伏見は、草廬の陶淵明的生き方への志向と符合し、草廬に桃源郷を連想させたのである。しかしこのことだけに、草廬が伏見を桃源郷にまで見立てた理由を求めることは、必ずしも十分とは言えない。それ以上に、伏見が草廬にとって愛すべき故郷であったことを考える必要がある。草廬の書簡集『艸廬尺牘』の中には、「僕、姓は龍、名は公美、字は子明、號は^{そうろう}艸廬。本は山城の国伏水の人なり。郷に山有り、桃華を以て海内に名あり。故に又自ら桃源子、或は桃華山人と称す」(「朝鮮國信使洪純甫通判に贈る」原文は漢文)とある。先に挙げた「同人手を携えて仙源を問ふ」の詩に付された書状にも、同じ文面が見られる。ここで注目されるのは、草廬が桃花の美しい伏見が自分の故郷であると言い、そして自ら桃源子、或は桃華山人と名のり、伏見に対して桃源郷への連想を誘う点である。つまり伏見が草廬にとってかけがいのない故郷だからこそ、その桃花を介して桃源郷への見立てが成立したと考える必要があると言える。

龍草廬は幼い時期、家の不幸から母親を残して故郷・伏見を離れ、京都の商家で養育された経歴を持つ。この伏見との離別と家の没落がとても耐え難いものであったことを、草廬は13歳の時に詠んだ詩のなかで次のように語っている。

思郷

郷を思ふ

総角辞家客洛陽

^{そうかく}総角 家を辞して洛陽に客たり

秋風一望白雲長

秋風一望 白雲長し

帰心不為蓴鱸美

帰心 ^{じゅんろ}蓴鱸 ^{うま}の美きが為ならず

衰白慈親在故郷

衰白の慈親 故郷に在ればなり

(『草廬集』初編卷之五)

「総角」元服前の子供の時分に伏見の家を離れ、京の都で暮らす。秋風が吹く中、空を一望すれば、白雲が遠くまで続いている。ところで中国の古典『世説新語』には、次のような話が見られる。三世紀、西晉の人に張翰^{ちやうかん}という者があった。当

時張翰は洛陽で役人をしていたが、秋風が立つのを見て、急に故郷の蓴菜じゆんさいの吸い物と鱸魚うどのなますが恋しくなった。そこで張翰は「人生は気楽に過ごすことが肝心で、役人生活に縛られ、故郷から遠く離れて暮らすなんぞ、実にくだらない」と思い、官職をあっさり捨てて、故郷へ引き上げてしまった、という⁸⁾。これは晉時代の人ひとの潔い生き方を語る話として、後世に伝えられるが、今秋風が吹く中で草廬が故郷を思う気持ちに、蓴菜の吸い物や鱸魚のなますへの恋しさなどない。老いた母親が一人暮らししているからこそ、故郷が偲おもばれるのである。張翰と違い、草廬の故郷への思いには、悲哀が込められている。また井伊家の文学として彦根に暮らしした時の作品にも、故郷への切ない思いが吐露されている。

乙酉春宦暇帰伏水旧栖
有感而作

乙酉の春、宦暇にて伏水の旧栖に帰り、
感有りて作る

帰来伏水水郷東
故宅就荒人自空
只管雀牙穿屋上
生憎蛛網窓窗中
経年稍尽青氈物
懷古堪驚白髮躬
園有不言桃李樹
猶迎旧主咲春風

帰り来る 伏水水郷の東
故宅 荒に就きて人 自ら空し
只管に 雀牙 屋上を穿ち
生憎や 蛛網 窓中を窺ぐ
年を経て 稍や尽く 青氈の物
古を懷ひて 驚くに堪えたり 白髮の躬
園には言わざる桃李の樹有りて
猶ほ旧主を迎へて 春風に咲ふ

(『草廬集』三編卷之四)

これは51歳の龍草廬が官休を得て、久しぶりに故郷の伏見に帰った時の詩である。昔、自分が住んでいた家には、もう誰も住んでいない。天井にすずめが穴を開け、蜘蛛が巣を張っている。かつて使われていた「青氈」など家財道具はすっかりなくなってしまった。昔のことを懐かしみつつ今の自分を見れば、その老いた姿にただ驚くばかりである。庭には『史記』『李將軍列伝』にあるような、物を言わない「桃李」の木がある⁹⁾。それは変わらぬ様子で「旧主」草廬を迎え、春風を受

⁸⁾ 『世説新語』識鑒篇：張季鷹辟齊王東曹掾在洛、見秋風起、因思吳中菰菜羊羹鱸魚膾

⁹⁾ 『史記』李將軍列伝：桃李不言、下自成蹊

けて咲いている、という内容である。この伏見への帰郷の際に草廬は、他にも「^き乙酉の春、伏水に帰りて故旧の諸君に贈る」「伏水の旧栖を遥憶す」、及びまた彦根に戻っていく際の「伏水の諸君に留別す」(以上すべて『草廬集』三編卷之四)などの詩を詠んでいる。久しぶりの里帰りで、伏見への懐かしさや離れて暮らす年月の長さに、あらためて思いをめぐらすのである。またこれら一連の詩では、老いに対する嘆きと藩勤めのつらさも詠みこまれ、草廬の故郷への思いはより悲痛に響く。

当時、教官として大藩に迎えられることは、学門に立身出世をかける者にとって、理想的な境遇であった。草廬自身、幼い頃から学問で身を立てることを志し、それを彦根藩の文学に就任することで見事達成していた。しかし儒者として望むべき境遇を得たにもかかわらず、心の底にはいつも、故郷の伏見を懐かしむ気持ちがついて回ったのである。草廬が彦根に住んだ時期に編纂されたこの『草廬集』三編に、伏見を歌った詩が多く見られるのは、藩勤めの束縛による故郷との隔たりが、一層草廬の郷愁を掻き立てたからであり、これこそ草廬に強い故郷愛を抱かせた要因と考えるべきなのである。草廬の生涯を伝える資料によれば、幼い日に、家の没落と貧窮により故郷を離れて以来、草廬は京都周辺にあっても、伏見で長期暮らすことはなかった。彦根藩に仕えた時期は彦根に移動し、藩を致仕した後は京の鴨川辺に居を構え、その後も伏見で生活していないのである。つまり草廬はその生涯において、伏見を外から眺めていることが多かったのである。しかし草廬の詩には伏見を懐かしむ気持ちが溢れ、帰るべき所として常に考えていたことが窺われる。またその伏見は当時、桃花の美しさで知られた地でもあった。そこで草廬の故郷への思いは、懐かしさからそれに対する隔たりに障害に、憧れに近い感情にまで発展したのである。こうして陶淵明への敬愛心も手伝い、草廬の漢詩世界のなかで日常生活から逃避する場として伏見は見い出され、そして桃花を介して桃源郷が重ねられたのである。そもそも桃源郷は、ふとどこか郊外で見かけそうな、身近かな懐かしさを感じさせる理想郷であった。ゆえに桃源郷に見立てられた故郷の伏見は、草廬個人にとって心のよりどころであり、かつ詩人として自らの文芸世界に求める精神開放の場として機能したと思われる。これは、草廬の故郷愛と学問姿勢及び文学的美意識を同時に満たす最適の表現であったと言えよう。

江戸時代、漢詩人の多くが、陶淵明及びその詩文に基づいた作品を作った。詩人たちの陶淵明受容は、各時代により推移したのだが、泰平の世を謳歌した享保、

文化、文政の頃は、とりわけ桃源郷のテーマが好まれたという¹⁰⁾。その中で、龍草廬の伏見を桃源郷に見立てた詩も生まれた。桃源郷を詠む詩の多くは、陶淵明の『桃花源記』の要約や解釈、あるいは身近な小風景を桃源郷になぞらえただけのもので、さして新味を出してはいなかった。しかし龍草廬は、一貫して故郷の伏見を桃源郷に見立てた詩を詠んだ。この龍草廬の一例は、桃源郷を詠む漢詩の詩作動機として、その多様化を提示したと言えよう。それは故郷を作品の中により美しく描き出すことで、桃源郷を「帰るべき場所」として、自らの内に取り込もうとした、一種のユートピア願望と見ることができるからである。

テキスト

『草廬集』『紹述先生集』『山陽詩鈔』は『詩集 日本漢詩』（富士川英郎・松本忠・佐野正巳編 汲古書院 1984）による。

主要参考文献

- 中野三敏「龍草廬」『近世の漢詩』（汲古書院 1986）
中野三敏「龍草廬と幽蘭社」『中国叢書 9 日本漢学』（大修館書店 1968）
林屋辰三郎『京都文化の座標』（人文書院 1985）
加藤二郎『伏見桃山の文化史』（自印 1953）
大日本史蹟研究会『伏見桃山』（誠文館 1920）
大矢根文次郎『陶淵明研究』（早稲田大学出版局 1967）
杉田英明『桃源郷とユートピア』（平凡社 1989）

¹⁰⁾ 大矢根文次郎『陶淵明研究』pp.394